

紹介

元木泰雄著

『兵範記』を読む

——保元の乱の全記録——

院政期を研究するうえで、『兵範記』が最重要史料の一つであることに異議をささむ研究者はいないだろう。『兵範記』とは、鳥羽院政期から後白河院政期にかけて、院・女院・摂関といった有力者に仕え、朝廷の実務官僚も務めた中下級貴族、平信範の日記である。本書は『兵範記』の中でも、主に保元の乱に至るまでの記事を取り上げて、精読することで、当該期の貴族社会の動向を活写している。『兵範記』の重要記事について、一つ一つ読み下しを載せ、記載事項を詳細に解説するとともに、当該期の政治過程におけるその記事の位置付けを示す。院政期政治史の入門書であり、古記録読解の入門書でもある。

本書は四部構成であり、巻頭に序論が、巻末に補編と解説が付されている。

序論では保元の乱の発生を伝える『兵範

記』保元元年（一一五六）七月十一日条を紹介し、『兵範記』の史料的特質と、記主平信範について解説を加える。『兵範記』の世界への導入であると同時に、保元の乱という破局へと突き進む鳥羽院政期政治史への導入としても機能している。

第一部は、『兵範記』冒頭の天承二年（一一三二）から久安五年（一一四九）までを扱っている。ここで焦点があてられるのは、摂関家家長の藤原忠実や現任摂関である忠通、そして彼らの子女に仕える家政職員としての信範の活動である。院政期の貴族の家には、所領管理や儀式遂行を担う政所、家に仕える職員の統制を担う侍所といった、家政を担う機関が置かれていた。信範のような中下級貴族は、多くが院・女院・摂関といった最上層貴族の家政機関に職員として仕えた。儀式・家政の諸手続きや、貴族各人の人間関係といった話題こそが、中下級貴族層にとって最大の関心事であった。第一部では、『兵範記』の中でも信範が参加した摂関家の儀式の記事に注目して、摂関家政の実態や摂関家をめぐる人間関係を繙いていく。同時に、当日の儀式次第と先例とを詳細に比較し、上司・同

僚のミスや「失」として書き立てる、うるさ型としての信範の人物像を描きだしている点も、第一部の見所である。

第二部は、仁平二年（一一五二）から同四年までを扱っている。この時期には忠実が長子忠通を義絶し、忠通の有していた藤氏長者の地位や摂関家領莊園を没収し、弟の頼長に譲渡するという事件が勃発した。結果、摂関家は忠実・頼長派と忠通派とに二分される。第二部では、摂関家内部対立の激化に伴う政治情勢の混乱を、『兵範記』の記述から鮮明に描き出す。特に、権力を握った頼長が強引な政策を連発し、他の貴族や京周辺諸寺社からの反発を買っていくさまは、記録が詳細で生々しい。無論、信範も対立と無縁ではない。忠通に仕えていた信範は、忠実・頼長によって、家政職員として与えられていた役職や所領を没収された。忠実・頼長に反発する信範は、日記の中で両者に対する批判を強め、彼らの主催する儀礼に対し、お得意の「失」を容赦なく書き立てるようになる。生来の生真面目さに私怨が混じった信範の書きぶりには、中下級貴族の悲哀がにじむ。

第三部は、久寿二年（一一五五）から同

三年までを扱っている。久寿二年には近衛天皇が死去し、後継にたてられた後白河天皇は、忠通らの支持を受けて忠実・頼長への対立姿勢を鮮明にした。加えて、頼長は近衛天皇呪詛の嫌疑をかけられ、政界での失脚を余儀なくされる。忠実・頼長は、鳥羽上皇の後である高陽院を通じて政治的復権を図るが、同年末に高陽院が、翌年には鳥羽上皇が死去し、忠実・頼長に復権の目はなくなった。かくして貴族社会は、保元の乱という未曾有の大破局へと突入する。第三部では、当該期における忠実・頼長の求心力低下と、政治的緊張の高まりが『兵範記』をもとに描かれる。両者が主催する儀式では、貴族たちのボイコットや、儀式全体の士気の低下が目立つようになる。それに伴う混乱を、信範は「違乱」「不審」として暴き立てる。加えて、鳥羽上皇死去と相前後して、京中には後白河天皇や忠実・頼長が呼び寄せた武士が流入し、武力行使を伴う事件が頻発した。信範の記す政治的危機は身近だけに克明である。

第四部は、保元の乱の経過と結末を扱っている。保元の乱の際、信範は忠通に従って、後白河陣営に参入した。『兵範記』に

は信範が当事者として見聞きした事柄は勿論、忠実・頼長陣営について人物の供述も詳細に記されており、両陣営の陣容や詮議の内容、合戦の推移などが明らかとなる。加えて、信範は忠通の家政職員として、戦後処理に関わった。『兵範記』には、乱後の摂関家の処遇や忠実・頼長に従った人々の処罰の様子まで記される。本書が『兵範記』を「保元の乱の全記録」と評する所以である。さて、第四部は、著者の元木泰雄氏が他の研究者との対立点を明確にしているという点で特徴的である。保元の乱の意義や評価は、近年活発に議論されており、『院政期政治史研究』（思文閣出版、一九九八年）をはじめとする元木氏の見解も、批判にさらされてきた。かかる批判に対して、元木氏は『兵範記』の読解を通じて反

批判を試みている。議論の可否をここで論ずることはできないが、史料の精読によって組み立てられた本書の記述は説得力に富む。今後、保元の乱に言及する研究者は本書を看過すべきではない。

補編には「日本史修行四半世紀」「附高から始まった歴史学研究」という二編のエッセイが収められ、日本史研究者としての

歩みを元木氏自身が述懐する。解説「元木泰雄先生の略伝とその相貌」では、元木氏から教えを受けた坂口太郎氏が、元木氏の生涯と本書執筆の経緯を振り返る。

以上、本書の内容を概観した。本書は、政治史を組み立てるうえで史料、特に古記録を「どのように」読むかというガイドを示した著作であり、後進に範を垂れる理想的な入門書である。同時に、本書は平信範個人の体験と貴族社会全体の政治情勢とを往還しながら、鳥羽院政期の時代像を提示しており、当該期の概説書としても一流である。本書からは、元木氏の教育者としての相貌と、研究者としての相貌の両面がうかがえる。本書は優れた研究者であり、優れた教育者でもあった元木氏による歴史叙述の到達点の一つとして評価できる。

なお、本書は元木氏の遺作であり、坂口氏が原稿に適宜修正を加えることで、出版が実現したという。重厚な書に対する丁寧な仕事に、心底より敬意を表したい。

（四六判 四一四頁 二〇二五年三月）

KADOKAWA 二六〇〇円＋税

（坂本陽太 京都大学大学院文学研究科

博士後期課程）